



とらいあんぐる



2013 年 11 ・ 12 月

一音会ミュージックスクール発行

「おばあちゃん」

私の祖母は、生きていれば、この夏、110歳になっていました。祖母は、私の母の母です。

祖母は、病に倒れた母に代わって、私を育ててくれた人です。

私にとっての母は、密着しすぎていて、まるで自分の一部のような存在でした。

母の病のせいで、幼い時から、母と私とは“助け合う間柄”になっていましたから、母は、母というよりは姉のような存在でした。

また、祖母が、母と私を等しく子ども扱いするので、そのせいもあって、母と私は姉妹のような関係になったの

だと思っています。

ですから、一般にいわれる“母親”のイメージは、実は私にとっては祖母なのかもしれません。

祖母は明るい人で、よく鼻歌を歌っていました。おそらく音楽が好きだったのででしょう。時代が違えば、音楽を志していたのかもしれません。

祖母と母は、よく似ています。

2人とも、良くいえば、常識にとられない人たちです。悪くいえば、常識のない自由人です。

新しいこと、楽しいことをあみだすことに長けていて、何をいい、何をするか、予測のつかない人たちでした。

楽天的にふるまおうとする人たちで

した。その実、まったく楽天的ではないのも、2人そっくりでした。

あれこれと深く考えるくせに、2人とも、何も考えていないかのようにふるまうことを好み、そのようにふるまうことが、とても上手でした。

神経質で現実主義者でありながら、2人とも、なぜあんなにトンチンカンなことを、生涯にわたって、いい続けられたのか、不思議でもあります。

そんな2人の最大の共通点を、最近になって、私は思いつきました。それは、「逆境に強いこと」です。

私が小学校に入る時に、大きくつまづいた話を以前に書きました。私の二度にわたる知能検査の結果は、二度とも「測定不能」でした。

その時、祖母は、目を丸くして、こういったそうです。

「はかれない、ってことは、はかりしれない！ ってことかもしれないじゃない？ この子は、普通のものさしでははかれない、すごい子かもしれないわ！ 楽しみだわ！」

もちろん、その時の「測定不能」は、「悪すぎて、数値であらわせない」という意味でした。

祖母も、それを知った上で、いつているのですが、祖母は少しも不安そうではなく、むしろおもしろがっている様子だったそうです。

母は、その後も、いろいろとできないことが多く、規格外の私を育てる際、この「はかりしれない」という解釈に、何度も勇気づけられたとっていました。

祖母の鷹揚さは、一貫していました。

私が当時、まだ幼かったから、こんなふうに楽天的になれた、というわけでもないのです。

たとえば、私の大学受験の時のことです。

志望校を決めたものの、やはり受験直前には、不安になるものです。万全と思っている、思いがけない失敗をするかもしれません。

また他の大学を予定していないので、本当の1回勝負であり、それもまた不安をつのらせるものでした。

母に不安をうったえても、

「そ〜お？ だいじょうぶよ〜」

と、いつものように、ニコニコしているだけなので、話相手になりません。

“のれんに腕押し”とは、まさにこの

ことです。

祖母と母は、たいてい同じ反応なので、祖母に不安をうったえても、おそらく無駄でしょう。

それでも私は、祖母に話をきいてもらいたくなって、ある時、受験に際しての不安を、祖母に話しました。

がんばってはいるけれど、合格するとはかぎらないこと。

おさへの学校を用意していないので、不合格になったら行くところがないこと。

「落ちるかもしれない」と「落ちたらたいへん」を、繰り返しました。今思うと、堂々巡りのつまらない話です。

祖母は、その長い長い話を、黙ってずっときいていてくれました。

顔は、深刻そうな顔です。

めずらしく、母とは違う反応です。

祖母はじっと考え込んだあと、つらそうな表情で、口をひらきました。

「アッチャンが不合格になったら、それはとってもとって残念なことだわ・・・」

いつになく常識的な反応をする祖母に、私は逆にびっくりします。

祖母がこんな反応をするのは、私の

それまでの18年間の人生の中で、はじめてかもしれないと思いました。

祖母は、続けます。

「アッチャンが不合格になったら・・・アッチャンを合格させないっていうことは・・・しょせん、その程度の大学だっていうことなのよ。アッチャンの力が分からないようなら、もう日本の大学も、おしまいだわ」

祖母は、しきりに残念がります。

やはりというべきか、残念がるポイントが予想外です。

しかし祖母は、しばらく日本の大学教育を憂えた後、急に顔を輝かせ、いいます。

「そうだ！ アッチャン！ その時は、日本の大学にすぎりつくことない！ おばあちゃんがお金を出してあげるから、ハーバードでもケンブリッジでもMITでも、アッチャンに真にふさわしい大学にお入りなさい」

一転、祖母は楽しそうです。

アメリカやイギリスについて、熱く語ります。話は、どんどん広がります。

祖母は、英語が得意で、この方面の知識が豊富なのです。

話が大きくなりすぎて、何の話をし

ていたか、もはや分からなくなります。

ともなって私は、何がそんなに不安だったのか、分からなくなっています。

「・・・えっと・・・えっと・・・
やっぱり、日本の大学でいいや・・・」

話を完全に見失った私が、「ま、いいか」という気分になり、祖母の部屋を出ていこうとすると、急に祖母が「あっ！！」と、大きな声をあげました。

なににごとだろうと、急いで祖母のもとにひきかえします。

祖母は、重大なことを、今、思いついた、という口調で、

「アッちゃん、オックスフォードも良いかもしれない！」

といい、ニコッと笑いました。

そこではじめて気づきます。

祖母は、私をずっとからかっていたのかもしれない。

私が不安のあまり、視野がせまくなっていることを感じて、話をわざと大きくしていたのかもしれない。

意図的にまぜかえしていたような気もするのです。

祖母とのやり取りは、こんなことが多くありました。

「おばあちゃんは、さっぱり分かっ

ていない」と思ったら、実は祖母はすべて分かった上で、からかっていたり、反対に、冗談でいっているのだと思っていたら、実は真剣そのものだったりします。

この時のやり取りも、どこまで真剣で、どこまで冗談だったのか、今にいたるまで、分かりません。

祖母は、他人の不安を取り去る達人だったと思います。

私は今でも、困ったことがおこると、祖母の顔を思い浮かべます。

そうすると、気持ちが大きくなってくるような気がします。

すべてが小さなことのように思えて、「ま、いいか」という気分になれるのです。

そして、幼い頃から何百回もつぶやいてきたあのセリフを、やっぱり唱えることになります。

「おばあちゃんには、かなわない！」

(江口 彩子)

